

海外文献紹介

Raymundo Panikkar, *Myth, Faith, Hermeneutics—Cross-Cultural Studies*, N. Y., Paulist Press, 1979.

葛 西 実

レイムンド・パニカ (1918～) は日本では比較的未知の人であるが、アメリカ・ヨーロッパ・インドでは宗教・哲学・文明史・解釈学の領域で重要な思想家の一人として意識されている。二つの具体的な例をあげるならば、このことは明らかになるであろう。一つはカリフォルニア大学・サンタ・バーバラでのシンポジウムがエリック・エリクソン (Erik Erikson), ミルチェ・エリアーデ (Mircea Eliade), ポール・リクール (Paul Ricour) と共に単独のテーマとしてパニカをとりあげていることである。他は、解釈学の領域で貴重な役割を果たしてきたローマ大学のカステリイ会議の創始者、責任者の一人であり、この会議の指導的役割を果たしていることである。

出版された専門著書は30冊を越え、学問的論文は主要なものに限定しても300より少くはない。これらの著書、論文の言語も、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、英語と多彩であるが、最近の著書はすべて英語で書かれている。その代表的なものをあげると次のようなものがある。 *Worship and Secular Man, The Trinity and the Religious Experience of Man, Icon, Person, Mystery, The Vedic Experience, Mantramāñjanī, The Intra-Religious Dialogue, Myth, Faith and Hermeneutics. The Vedic Experience* は937頁の大冊であるが、これについては既に文献として紹介してある。ここでと

りあげる *Myth, Faith and Hermeneutics* も 500 頁の重厚なものである。

これらの研究活動の基調は崩壊の危機意識であり、中心的課題は再生の可能性と新生の方向である。パニカの研究の基調と課題を理解する為には、パニカの背景を知る必要がある。インド・ケララ州出身の敬虔なヒンドゥ教徒を父、熱心なカソリック教徒のスペイン人を母とする家庭に生まれ、ヨーロッパで育てられたことは、信条のレベルでは幼児の時から二つの宗教的絶対の中で育てられ、いわば二つの根を意識していたことである。長じて化学・哲学・神学を専門分野とし、それぞれの領域で抜群の成績で博士の学位を授与されているが、それらの知的領域における絶対の問題、さらにその脈絡としてのヨーロッパ社会の世俗化、30代の終りに幼時から意識していた二つの根の一つが展開したインドの実状にふれることになるが、そこに依然として生きている植民地主義の現実がパニカの危機意識、中心的課題と不可分である。これらの諸領域の絶対は、文化的には単一形態主義をとるが、それは文化・文明の名に価する唯一の様式、構造に対する確信であり、このことは唯一の政治体制、経済体制、神、宗教、解釈の主張となり、植民地主義者の態度の根底に生きている。今日の支配の様式は、西欧の様式であり、そこには少なくとも三つの前提がある。一つは科学・技術的植民地主義、第二は世界は一つになりつつあるという事実認識とその過程で生存する唯一の方法としての西欧的生活様式への順応の絶対性である。第三は、文化と教育が技術的に操作されるということである。この帰結は、社会の冷い死である。

これを要約するならば、宗教的構造の否定としての世俗主義、植民地主義に危機の根因を見ているが、問題を複雑にしていることは、歴史的に宗教的構造は単一ではないことである。パニカにとって、これは抽象的な問題ではなく、きわめて具体的な、しかも生きることに直接的にかかわる根底的な問題であった。パニカはその突破口を、無神論、アポフアティズム、根元的相対性に見いだしている。その突破口を思想史（宗教史）の脈絡の中で見ると次のようになる。パニカによると、神話的思

惟 ロゴスの思惟、神話とロゴスの自由における共存を人類の思想史を構成している三つの綾^{あや}としているが、これは単純な、直線的な歴史の三段階説を意味していない。第一、第二の綾は神と存在の相克の歴史という視点から捉えなおされ、そこで浮彫にされているのが、存在の神化の歴史と神の存在化の歴史であり、書かれるべき課題として残されている。第三の綾にアポフアティズムと根元的相対性が無神論と共に位置づけられているが、第三の綾の基本的精神を表わしているのは根元的相対性であり、生きるべき課題として残されている。神と存在の相克の歴史をとおして生まれた思想の諸形態は人間の宗教性を構成しているが、その妥当性は根底から問われている。具体的には三つの異った展開をしているが、第一は存在としての神の否定である。神の概念化、抽象化、神の存在との同一化の否定としての無神論は、神理解の再検討の必要性を指摘している。第二はアポフアティズムであるが、それは非存在としての神の否定であり、神は人間の思惟的枠組、比較論的枠組を越えているので、沈黙を余儀無くされる。第三は根元的相対性で、神は自由な存在ではなく、存在の自由として理解される。ここでは神は、一切の存在の真の、無限な相互のかかわりを通して理解され、人間は一回性の、非時間的な、ユニークな生き方を基調にして、文化の根源的意味にたちかえって、共に生きること、共に耕すこと、働くこと、共に祈り、待望することが要求される。以上の検討を通して二つのことが明確にされたが、一つは、世界像はダイナミックで、さまざま陰影をもっていることであり、他は、異った世界像の理解に一つの伝統、或いは文化理解の方法を安易に適用できないことである。

このようにパニカの危機意識、中心的課題の背景を検討してみると、一つの問題が依然として残される。それは複数の宗教的構造の理解の方法である。その方法の解明の試みが、『神話・信仰・解釈学』である。それは1965年から1974年にかけて発表された論文から構成されている。一読して—これは容易なことではないが—明らかになることは、複数の

宗教的構造の理解を今日の歴史的課題の中心においていることである。その糸口として神話・信仰の意味を検討し、それに適合した解釈の方法を提起しているのである。したがってこの大著は、複文化における宗教的経験の研究でもある。

パニカにとって神話は何を意味しているのであろうか。神話とは光のようなもので、見えない。神話と英知とは深く結びついている。生きている神話は解釈を必要としない。神話が解釈されると、それは最早神話ではなく、その論理化である。神話は光のように透明で、神話的物語はその表現である。神話は思惟の対象ではない。神話は、むしろ思惟の重荷から人間を解放し、思惟を純粹にし、自由の現実を明らかにするが、それは選択の自由ではなく、存在の自由である。具体的にシュナセエパ(Sunahsepa)の例をとりあげて検討しているが、神話は、人間を限定された状況—死の恐れ、生命に対する執着、願望によって支配される、自然と文化—から解放する。真の意味での自由の超越的展望を明らかにする。それは時間、空間の世界に埋没することを拒否すると同時に、その無限の意味を明らかにする。このようにパニカの神話の意味を検討してくると、ミルチェ・エリアーデのそれと区別しがたい。

しかしこのような神話の現実はどのようにして理解されるのであろうか。それは信仰である。信仰は人間的次元において神話に対するものである。信仰の自覚は、神話的まじわりを要求する。この信仰なしには、人間的思惟、行動、意志、発言は不可能である。信仰は人間の条件として必須不可欠である。このように神話・信仰を理解するならば、学としての解釈学はどのような位置をしめるのであろうか。ここで確認しておきたいことは、神話は象徴から構成されているが、象徴が象徴であるかぎり—象徴が生きているならば、解釈学を必要としないことである。解釈を必要としているのは生きている象徴ではなく、しるし、記号、標識である。解釈の型として、形態的、通時的の二つがあり、前者は論理、理性の働きが基本的に要求され、後者は脈絡としての歴史的次元につい

ての知識が基本である。しかし、これら二つの型の解釈は、生きてい
る象徴が現出するモーメントの背景と場を構成する周辺的なものにすぎ
ない。これら二つの解釈にたつてのもう一つの解釈の型は、中心を意識
しての解釈で、これをダイアトピカルとパニカは特徴づけているが、そ
れは二つ、或いはそれ以上の文化の神話がコミュニオン（まじわり）
に入るモーメントにひらかれている。これは新しい地平線の展望を意味
する。これはミルチュ・エリアーデの新しい人類の展望と区別しがたい
ほどに交錯している。しいて相異を指摘するならば、パニカはそのよう
な状況のただ中におかれていることである。

文化の研究が、その宗教的構造を不問にするならば、その文化を否定
することになるという理解が正しければ、これはパニカの危機意識につ
ながるが、パニカの試み、パニカの証言は無視することができない。